



演技を披露する生徒たち

【網走発】本年度発足した紋別高等養護学校（佐々木建校長）体操同好会は、九月下旬に道立野幌総合運動公園体育館で開かれた第

一回大会で、十一月に千葉県で開催される第七十一回全日本新体操選手権大会の出場権をかけた最大級の大会で、全国各地から団体十三チーム、個人六十五人が出場した。

体操同好会は、生徒の「体を動かす機会がほしい」というニーズを受け、この五月に発足。十九人が所属している。大会には一・二年男女混合七人編成のチームで出場。発足以降、初めて練習の成果を披露することとなった。

どの生徒も競技の経験は全くなかった

全国大会エキシビジョン出場 積み重ねた練習成果披露 紋別高等養護の体操同好会

本年度発足

三回全日本男子新体操クラブ選手権大会兼第二十六回全日本社会人男子新体操選手権大会のエキシビジョンに出場した。男子新体操の大会に特別支援学校のチームが参加することは全国でもあまり例がないという。生徒たちは、これまで積み重ねてきた練習の成果を披露した。

大会は、十一月に千葉県で開催される第七十一回全日本新体操選手権大会の出場権をかけた最大級の大会で、全国各地から団体十三チーム、個人六十五人が出場した。

が、三分間の団体演技の中行われる徒手体操やバックス転、側転などのタンプリングを一日一時間、週四回練習してきた。

当日まで学校の体育館ステージなどで練習を重ねてきたが、出場選手全員がそろって練習ができたのは一回のみ。そのような中、全国各地から来た選手や大会スタッフからの応援を受け、無事に三分間の演技をやり切った。

**挑戦する気持ち
今後も育てて**

大会終了後には、日本体操協会審判部から「試合の勝敗や点数も大切だが、男子新体操を楽しむことが何よりの本質。これからも競技を続けてほしい」と評価を受けた。

体操同好会顧問の永易健太教諭は「障がいの有無にかかわらず、今後も新体操を通して、自分の得意、不得意を理解することや仲間や周囲に合わせる力、新しいことに挑戦する気持ちを育てていきたい」と話していた。